

—ダウン症の書家・金澤翔子の物語—

泰子さんは、34歳の時に能の世界で知り合った裕さんと結婚。念願の子どもを授かったのは42歳の時でした。2320gで生まれた女の子はダウン症と診断された。しかし産後の気遣いから泰子さんには知らされなかった。産後、主人が呼ばれて「敗血症で交換輸血が必要。もう一つダウン症がある。だから交換輸血をしてまで助けるのはどうだろう」と言われた。主人はクリスチャンなので、そんな事は受け入れられなくて、窓の所に行って「僕は神の挑戦を受けるよ」と言ったんだそうです。

45日目に自分がその話を聞いたとき、背筋が凍るとはこういうことを言うのかと思うほど、力が抜けてベッドの側で崩れ落ちた。それまでに流産を3回もしていたので、期待していただけに衝撃は大きかった。

それまで自分は順調に好きなことをやってきた文学少女だったので、「知的でないものは美しくない」とまで、ひどいことを言っていた。それまで、もし男の子だったら日本一の能楽師に、女の子だったら日本一の書家にしよう、という思いが強かっただけに非常な衝撃を受けた。

当時の日記に「翔子の生命を救うべきなのか、いまだに迷う。ミルクの量を少々減らしてしまったりして、その後すぐに後悔に悩む。翔子が大きくなるのが怖い。ゆりかごの中で殺してあげなければ…。私は悪い母親であろうか…。」泰子さんは娘と一緒に死のうとまで思い詰めて行きました。

夫にうまくコントロールされて決行出来なかった。子ども可愛さの意味が分かった。どんなことがあっても親に育てさせてしまう。特にダウン症の子どもは可愛い。それで死ねない、私はそんな事は出来ない、と分かった。

それから地蔵巡りを始めた。ダウン症が治る奇跡を信じて、般若心経を唱えながら…。そして自分を助けてくれる神を捏造していく。神を創らなければしのげないほど苦しい…。今までの生き方に対する鉄槌<sup>てつひ</sup>が来ているのだと…。涙は目から出るものではなく、体中から絞り出るもの。でも段々と奇跡を願わなくなって、これで良いと思うようになった。

主人は誇りを持って育てた。ダウン症をものともせず、ひるんだ事はなかった。しかし翔子さん14歳のときに心臓発作に倒れ帰らぬ人となった。

翔子さんが5歳のとき、泰子さんから書道の手ほどきを受けた。熱心に稽古をして、めきめき上達し個展を開けるまでの腕前になった。今は母娘の家族になってしまったが、父親の夢だった書の個展も開くことが出来、書道教室の毎日も充実しているという。

実は、2012年の大河ドラマ『平清盛』の題字を書いたのも翔子さんです。

20歳で初めて個展を開いた日から現在まで、翔子さんの書を見て、なぜか涙を流す人が後を絶たないといえます。

翔子さんの書は、書家として大先輩である泰子さんに「50年練習してきましたが、到底書けません」と言わしめるほどの「人を感動させる力」を持っていたのです。

「そんな書を書ける純粋な魂や優しい心はどこからくるのだろう？」と考えた泰子さんは、一つの結論に至ります。「きっとあのとき1本多く持ってきた染色体こそ、彼女の持つ不思議な優しさの正体であり、『愛』の源なのではないか」と。

